

(前半)

P洞は私の記憶の中の品位ある街とは、ほど遠かった。鯨の背中のように綺麗だった屋根瓦の昔の家は、半ば土に埋もれるかのように荒れ果て、毎朝ほうきで綺麗に掃除した跡があった歩道は汚くブロックはガタガタで、家どうしが争うように軒を突き出し立ち並ぶ姿もみっともなく見え、たださえ狭い路地をより狭くしていた。このむさ苦しい路地を通り宿屋がある三叉路に出るまで、こんな場所に住んでいる人たちを私は馬鹿にし軽蔑しながら通り抜けた。

宿屋がある三叉路の斜め左側の道を進んだ右から三番目の家もまた、柱は傾き、表門の敷居が道より低く沈没しかけの廃船の様な古い家だった。表札も番地もなかった。向かいの家の表門までさがって、その家の軒と屋根瓦の間に生えている草を眺めていたら、門のすき間から中で人が動くのが見えた。家は今にも崩れそうだが、敷地は広く、さまざまなゴミ箱が置いてあり、みなゴミがあふれかえっているのを見ると、数世帯が暮らしているようだ。

私は大きく咳払いしながら門を押した。入ってすぐ横に部屋があり、練炭溝の前に腰かけて洗濯物を棒でかき回し煮洗っていた女が、こちらをちらっと見た。開け放たれた中門の奥には結構な広さの中庭があって、貸部屋もいくつか見えたが、ノウネおじさんの病床はこの入り口の部屋に違いないと思った。ソンプォ兄さんから聞いた排便の匂いをすぐに連想させる、突き刺す臭いがしたからだ。

(後半)

やがておじさんの手に力が入ったかと思ったら口も動き出した。私は彼のうつろな目の奥の歓喜を見逃さず、彼が発する言葉をしっかりと聞き取った。

「ウンピョ、ああ、ウンピョ。」

おじさんはそう口にした。おじさんが自分の息子を置いて甥を連れ非難して来てからは、一度も息子の名前を口にしたのを聞いたことがなかった。ウンピョの親友だった私に会っても、ウンピョもどこかで生きていればお前くらいに成長しているだろうにと嘆く素振りを見せるかと思いきや、そんなことすらしなかった。彼は息子を見捨てたと同時に息子の名前すら忘れてしまっただけでなく、記憶まで消し去ってしまったかのようなだった。息子の代わりに甥を連れ非難して来たとき自慢する時の「息子」も、普通名詞での息子でしかなく、ウンピョという固有名詞としての息子ではなかったのだ。

彼が初めて口にしたウンピョという名は、私だけがようやく聞き取れるほどのかすかなものだった。それが私の耳にはとても切なく聞こえた。彼は力の限り、その悲しく切ない

声を出していた。これで三十数年前のウンピョの母親の悲しみの念が、今ようやく晴らされたのだ。

私はこの日を待ち望んできたはずなのに、気が晴れたというよりは虚しさを感じたことに驚いた。

再びキーホルダーの店が立ち並ぶ通りに出た頃には、まさに日が暮れようとしていた。日暮れ時になると、いつも胸いっぱいにかぎをぶらさげ、袋に入った米と塩サバを買ってふらふらと歩いていたノウネおじさんの姿を思い出す。米と塩サバのせいか、かぎが勲章に見えるというおかしな錯覚は起こらなかった。彼は寂しくみすぼらしいかぎ屋でしかなかったのだ。

私が彼を「直視」できるまでに、なんと三十二年の月日がかかったのである。

end